

19世紀の開港場における接触言語の変遷 —ピジン起源の日本語「チャブ」と関連語についての考察—

西沢 雅代

1. はじめに

日本は江戸時代以降、約 250 年にわたり鎖国政策をおこなってきた。しかし幕末の 1854 (安政元) 年に来航したペリー提督 (Commander Matthew C. Perry) と幕府との間で日米和親条約、いわゆる神奈川条約が締結された。このときに調印地となったのが横浜である。この神奈川条約の締結により日本は長きに渡った鎖国時代に終わりを告げ、近代国家へと歩みだすことになったのである。その後 1858 (安政 5) 年「安政の五カ国条約」に基づいて 1859 (安政 6) 年 7 月に長崎、函館、神戸、新潟とともに横浜は開港することになった。長い鎖国状態の間、長崎の出島のような特別な場合を除いて日本人が外国人や外国語に接する機会はほとんどなかった。ところが突然日本が開国することになり、横浜が開港場の一つとして選ばれたのである。開港にともない横浜居留地がつくられ、そこに多くの外国人や地方からも日本人が集まってきた。幕末の開国、明治維新そして明治時代へと急速に近代化が進み、開港場であった横浜では外国人や外国のものが急速に日本人の生活の中にも溶け込んでいった。横浜はまさに文明開化の中心にあり、それは言語についても例外ではなかった。横浜居留地内ではお互いのコミュニケーションをはかるために外国人と日本人との間に言語接触がおこりピジン語が発生した。ピジン (pidgin) とは共通の言語をもたない人々のあいだに起こる、ある限られたコミュニケーションの必要を満たすために生まれる周辺的な (marginal) 言語である。 (Todd 1974 田中 (訳) 1986) 横浜居留地ではコミュニケーションの手段としてこのピジン語が少なくとも数十年間にわたり使用されていたのである。しかし 1872 (明治 5) 年、鉄道の開通によって距離が近くなった東京言葉の強い影響を受けたことや明治の中期には文化や経済の中心が東京に移ってしまったこと、さらに 1899 (明治 32) 年に外国人居留地の廃止などによって次第にピジン語は使われなくなっていったのである (伊川 2000)。

開港場に選ばれた横浜で日本人が使用していた所謂「横浜ことば」と呼ばれるものの一つにピジンを起源とする「チャブ」がある。そして「チャブ」と関連していると考えられることばに「チャブ台」、「チャブ屋」、「ノーチャブ」がある。本稿ではこれら 4 つのことばの変遷について調査、考察をし、それらの現在を 2. 先行研究のロング (1999) で指摘されているピジン語の行方の 3 つの分類に従って分類を試みる。

尚、「チャブ」の表記は文献によりひらがな、カタカナの両方がみられるが、本稿ではカタカナの「チャブ」で統一する。

2. 先行研究

横浜居留地で発生したピジン語に関する研究対象となる文献に「Exercises in the

Yokohama Dialect (Atkinson 1879) 」がある。これは居留地で生活する外国人が日本人とコミュニケーションをはかる際の参考になるようにと英語から日本語へ語彙や表現、そして文例の翻訳をまとめた 31 ページほどの小冊子である。著者は当時出版されていたヘボン (James Curtis Hepburn) の『和英語林集成』という和英辞典のような学問的なアプローチでなく、あくまで実際の生活に役立つようにこの小冊子を編纂したのである。この小冊子を用いて Daniels (1948) は横浜ピジン語の語彙を語源的に分析し、カイザー (1998) はピジン語の特徴、例えば語彙の大半が多義語である、語順が安定している、活用はないか少ない、などが横浜居留地のピジン日本語の特徴と基本的に一致していること、それが日本語をベースとしたピジンとして唯一知られていることを明らかにした。ロング (1999) では横浜ピジン語をいくつか取り上げ、それらの行方の調査、分析をおこない、さらに横浜ピジン語の行方を次の 3 つに分類している。

- (1) 後に使われなくなり死語となったもの。
- (2) 地域言語として残ったもの。
- (3) 全国に広がり共通語となったもの。

これまでの先行研究では開港場である横浜居留地で使用されていたことばを当時から現在に至るまで、その変遷を個別に詳しく調査したものは見られない。そこで本稿ではピジン起源の日本語である「チャブ」とその関連語を取り上げ、それらの変遷を調査し、さらにロング (1999) が指摘した 3 つの分類に当てはまるのかを考察する。

3. 横浜居留地のことば

開港当初の横浜居留地の規模は約 1 平方キロメートルで日本に設けられた開港場のなかでは最大級であった。そこに多くの外国人や日本各地からも人々が集まり、港町ならではの多民族社会を形成し、お互いのコミュニケーションの手段としてピジン語が生まれたのである。このようなピジン語は横浜居留地内でしか通用しない特殊な言葉であり、日本語として正しくないというような批判的な見解もあった。例えば『和英商話』(1862) の著者である Van Reed は会話例の中に ‘The Yokohama Dialect is a very bad one.’ をあげ、その和訳として「ヨコハマ ナマリワ ハナハダ ワル ゴザル」と記述している。しかし当時の横浜居留地で暮らす人々にとって重要だったのは、語彙や文法が正しいかどうかということより、コミュニケーションである。

横浜居留地において外国人と日本人の間で使用されたピジン語で、主に外国人が使用したものが日本語を基層言語 (substrate language) とし、英語、フランス語、中国語など複数の言語を上層言語 (superstrate language) とするピジン日本語であるが、日本人も必要に応じてこれを使用していた。その一方で日本人も異国のことばを学ぼうと努力して片言の英語を話した。日本人が英語に慣れてくるとメリケン、ハイカラといった所謂カタカナ語にまで発展している。このように横浜居留地ではピジン日本語、日本人の片言の英語、そしてカタカナ語が混在してコミュニケーションが展開していたのである。

4. 母音と綴り字

日本語の母音は「ア」「イ」「ウ」「エ」「オ」の5母音である。一方で研究者により多少異なるが、英語は短母音、長母音、二重母音まで合わせると22の母音が存在する（竹林他 2015）。図1の母音表から日本語の母音「ア」に対応する英語の音としては /æ/, /a/, /ʌ/, /ɑ/, /ɒ/などが考えられる。Atkinson (1879) では英語から日本語への翻訳が行われているが、その表記方法のひとつとして、日本語の音に似た英語の単語を使つての表記がみられる。例えば、Tea(お茶)を Oh char, Difficult(難しい)を Moods Cashey と表記している。表1のように Bad(悪い)は Worry と表記されている。日本語の「わ」/wa/を wo(/wʌ/)で表記しているのである。同様に To buy(買う)は Cowで「か」/ka/を Co(/kɑ/)と表記している。つまり英語の綴り字、o は日本語では[オ]と発音するが、英語では綴り字が o でも発音は日本語の「ア」の音に近い /ʌ/, /ɑ/などの場合がある。そのため Atkinson は音で判断して Bad(悪い)を Worry、Buy(買う)を Cow と表記したと考えられる。このように母音の発音と綴り字は英語と日本語では異なる場合がある。

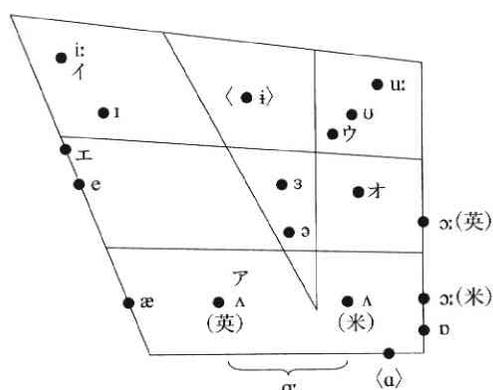


図1 英語と日本語の母音図（今井 2007 より引用）

表1 「Exercises in the Yokohama Dialect (Atkinson 1879)」からの表記と発音

英語	表記	発音	意味
Bad	Worry	/wʌri/	わるい
To buy	Cow	/kɑo/	かう

5. 「チャブ」

5.1 「チャブ」の意味

チャブとは食事、または食事をするということの意味で日本人の間で使用されていた（横浜市役所 1973）。また、同様の意味で外国人はチャイニーズ・ピジン英語の Chow-chow, Caw-caw が変化したと考えられる Chobber chobber を使用していた（Daniels 1948）。

5.2 「チャブ」の語源

「チャブ」の語源についてはいくつかの説がある。まず明治初期、横浜や神戸で外国人相手の食べ物屋で出していた米国化した中国料理、Chop suey (/tʃa:p su:i/)がもとになっているという説である(小泉 2002)。日本語と英語において発音と綴り字に差異があるということは4. 母音と綴り字で述べた。Chop の cho は/tʃa:/と発音される。これは、Atkinson が悪い=Worry、買う=Cow としたのと同様に cho (/tʃa:/) は日本には[チャ]に聞こえた可能性が高く、そこから「チャブ」になった可能性は否定できない。次に外国人が使用した Chobber chobber に関連しているという可能性である。Chobber chobber の cho が Chop suey の場合と同様に cho (/tʃa:/) と発音されたとすれば、日本人には[チャ]と聞こえ Chobber が「チャブ」に聞こえた可能性は高いのである。また、福建省など南中国でご飯を食べること、食事をするものの吃飯(cha-fun)がチャフンと聞こえたという説もある(小泉 2002)。当時、南中国の人たちが大勢日本に来ていたことから、彼らの使うことばが転用されたという可能性も考えられる。しかし当時、来日した中国人の多くは西洋人の買弁、つまり使用人としてである。従って当時の中国人が日本人に対して中国語を使って会話をした可能性は低いと考えられる。いずれにしてもこれらのうち一つを語源として特定することは難しく、むしろ複数の因果関係があると考えるのが妥当であろう。しかし英語と日本語における母音の発音と表記の差異が関係している可能性は非常に高い。

5.3 「チャブ」の使用時期

チャブが横浜居留地で使用されていた時期については次のような記述がある。

横濱於いても開港時から所謂横濱言葉乃方言として廣く使用されて居る。即ち食事を指示したもので、晝飯時に正午の時計が鳴り、ドンの號報があると「チャブだ」「チャブラう」「チャブした」などと言って「食はう」「食うた」事を意味するに等しい(横浜市役所 1973, 320)

チャブの語は横浜市民の間では奮くから今日までかなり廣く使用せられてゐる、一の方言である(斎藤 1929, 78)

斎藤(1929)で述べられている今日までとは1929年前後、つまり昭和初期のことである。このような記述から「チャブ」ということばは横浜では開港当初から少なくとも昭和初期までは頻繁に使用されていたと考えられるのである。

5.4 「チャブ」の現在

現在でもチャブという語は、『岩波 国語辞典 第7版 新版』(西尾他 2001)、『三省堂国語辞典 第7版』(見坊他 2014)、『明鏡国語辞典 第二版』(北原 2010)、『旺文社 国語辞典』(山口 2013)の4社の国語辞典には記載がないことから、現在

では一般的な国語辞典にはほとんど記載されていないと考えられる。そして実際の我々の日常生活でも「チャブ」を使用することは横浜出身者であってもまずないし、チャブということば自体を知っているものもほとんどいない。つまりチャブということばは昭和初期までは開港場での共通語として使用されていたが次第に使われなくなり、現在では日常的に使用することもなくなったと考えてよいであろう。このような点からチャブはロング（1999）が指摘した3つの分類の（1）後に使われなくなり死語となった、に分類できるであろう。

6. 「チャブ屋」

6.1 「チャブ屋」の意味

『岩波 国語辞典 第7版 新版』（西尾他 2011）によるとチャブ屋は開港場で、外国人や下級船員などを客とする居酒屋。幕末・明治の語とある。また『旺文社 国語辞典 [第十一版]』（山口他 2013）には横浜・神戸など貿易港をもつ町に発達した外国人や船員相手の小料理屋とある。しかし横浜ではそれらの意味とは異なる意味合いで使用されていた。

横濱の名物と云えばチャブヤである。チャブヤとは今更説明するまでもなく、外人専門の私娼窟をかく称するもので獨り横濱の名物としてよりは、日本の名物として世界的な名誉を欺つて居るのは心外千萬の名物である。（斎藤 1929, 77）

また、昭和15年頃について次のような記述がある。

チャブ屋はダンスホールとバーを兼ねたようなところでした。スタンドがあつてフロアがあつて、酒を飲んだり踊ったりできるんです。ドレスを着たホステスがいてね、その女が気に入れば別の部屋に行つて寝ることができる訳です。ショートタイムもあれば、ロングタイムもある。泊りもあるんです。私が行つた頃は、泊りは確か二十五円だつたと思います。当時、大学卒の初任給が五、六十円でしたから、安くはありません。（重富 1995, 136）。

このような記述があることから横浜のチャブ屋は一般的な国語辞典に記載されている意味とは異なる横浜独自の意味をもっていたのである。横浜居留地から現在の本牧方面に作られた外国人遊歩道の休憩所として始まり、そこから外国人に酒、料理を提供し、女性がその接待をする店となり、やがて風俗営業も加わっていった。つまり横浜ではチャブ屋といえは外国人相手の簡易売春宿の意味で使用されていたのである。

6.2 「チャブ屋」の語源

「チャブ」と同様に「チャブ屋」にも複数の語源説がある。まず英語の Chop house に由来するというものである。Chop house とは簡易食堂、安直料理店などいわゆる当時の簡単な料理店の意味である。リキシャマン（人力車夫）など、下層階級といわれる人々には chop (/tʃɑ:p/) が「チャブ」に聞こえた可能性が考えられる。これは4. 母音と綴り字 で述べたように日本語の「ア」に対応する英語の母音との関係によるものである。さらにハウス、ショップなどの略語として「や」が一般化し、伝承されていったと思われる（横浜市役所 1973）。次に当時もぐりの休憩所だった「あいまいや」の方言的表現「チャランプランヤ」を約して「チャブ屋」になったという説。さらに茶屋の子供の云うお湯の「ぶ」を挟んで「ちゃぶや」となった、「ジャップ」が転化した、色香の「チャーム」が日本語化して「チャブ」になったなど諸説あるが、これらの中では Chop house 説が有力なようである（斎藤 1929）。

6.3 「チャブ屋」の歴史

6.3.1 1864(元治元)年～ 休憩所、茶屋の時代

1864年の『横浜居留地覚書』により、英国陸軍のメジョール・レイの測量設計に基づいて、横浜村から根岸村へ通じる外国人遊歩道が作られた。完成したのは1865年9月1日である。幕府はこの遊歩道沿いに外国人相手に13軒の休憩所(茶屋)を開店させた。外国人を厚遇する一方で、ひそかに休憩所に内命して遊歩外国人の行動を監視させる目的もあった。当初は設備が貧弱だったため利用者は下級船員が多かったが、次第に一般外国人の数も増していき徐々に繁盛していったのである。この頃は散歩の疲れを癒す休憩所に過ぎなかった（斎藤 1929）。

6.3.2 1877(明治10)年～ あいまい屋、もぐり屋、銘酒屋の時代

1877年頃には遊歩外国人の数は増え、北方、本牧方面に30数軒の店が開業した。1880年代になるとチャブ屋は流行期に入り、利用者は居留地の外国人、外国船船員(上級)にまで広がっていった。この頃には本牧天徳寺下の春木屋、小港の大黒屋、北方の大野屋など、一流どころのチャブ屋が次々と出現した。この頃は「春木屋」「大野屋」など店名に「屋」が付く店が多かった。いわゆるチャブ屋らしい営業を始めたのもこの時期でこの時代の店が純然たるチャブ屋のルーツといえるであろう（重富 1995）。

6.3.3 1892(明治25)年～ チャブ屋時代

1890年代になるとチャブ屋は遊郭と共に繁盛し、本牧に30余軒、北方に10余軒、元町裏通りに10数軒と規模が拡大していった。その数が増えるにつれて、外国人の好みに合わせて店内を西洋風に改装せざるを得なくなり、室内には照明器具から椅子、テーブルまで西洋式のものをとり入れた。この頃に店名も「～屋」から「～ホテル」「～ハウス」に代わっていったと言われている。また「チャブ屋」という名称で呼ばれるようになったのもこの時期である（重富 1995）。

6.3.4 1919年(明治末期)～大正時代

日清・日露両戦争前後を中心にますます繁盛した明治末期から大正初期にかけてはチャブ屋の全盛期であった。横浜を中心とした対外貿易が盛んになり、外国人の往来が頻繁になったためである。戦勝国日本を訪れた外国人は上陸するや否や、人力車をよぶとリキシヤマンは強制的にチャブ屋に案内するほど、国際的な名物となったのである。この頃、居留地、中華街には20余軒あり、外国人が経営する店もあった。関内の一部に10数軒、不老町、寿町、野毛山下へと、その規模がさらに拡大していったのである。その頃のチャブ屋はかつての遊郭とは違って、今でいうバー、キャバレー、スナック、喫茶店、ダンスホールなどをミックスした内容でそれにプラスして風俗営業をしていた。しかし、遊郭とは異なりわだかまりのない明るいムードに溢れていたようである。このようにチャブ屋は関東大震災(大正12年)前までは外国人専門であったが、関東大震災後は日本人も出入りするようになった。谷崎潤一郎は1921(大正10)年に本牧で有名だったキヨ・ハウスの隣に居を構え、当時のチャブ屋風俗を自身の小説の中で次のように描いている。

— 私の家と呼応する如く海に突き出たキヨ・ハウスと言うチャブ屋があった「キヨ・ハウスの名は亜米利加までも響いてゐる。」と、そう云はれるほどの名高いチャブ屋で、東京の人は或は知らない者もあるが、横浜の港へ出入りする外国の船員であったら知らない者は恐らくなかったであろう。私の二階の書斎からは、恰もその家のダンスホールが真向かいに見え、夜が更けるまで踊り狂う乱舞の人影につれて、夥しい足踏みの音や、きやつ、きやつと云ふ女たちの叫びや、ピアノの響きが毎晩のやうに聞こえるのだった。(谷崎 1982)

このように谷崎が描いた大正後期のチャブ屋風俗は昭和10年代まで受け継がれ、その雰囲気はほとんどかわらなかつたようである。

6.3.5 1935(昭和10)年～

関東大震災以降、日本人がチャブ屋を訪れることが多くなつたが、満州事変から支那事変、さらには太平洋戦争へと戦時体制が続いていく中、チャブ屋の建物は戦時徴用工員の寮となり、1945(昭和20)年の横浜大空襲によってその姿は消滅したのである(重富 1995)。

6.3.6 1945(昭和20)年 戦後～

終戦後、進駐軍は憲兵司令部が中心になって、山下町の互楽荘アパートを慰安所に定めた。横浜市街地の中心部のほとんどはアメリカ軍に独領され、町の至るところで日本人女性を伴った進駐軍の兵士が闊歩する姿が見られた。その後、小港、本牧周辺に42軒のチャブ屋が復活したが、戦後のチャブ屋は戦前と比べると決定的に趣を異にするものであった。客はすべて進駐軍の兵士で日本人は“オフ・リミット”、つまり出入り禁

止だったのである。特に朝鮮戦争のころはアメリカ、フランス、イギリスはもとよりオーストラリア、エチオピア、フィリピンなど日本に立ち寄った各国の兵士がチャブ屋を利用した。最盛期には600人の日本人女性が働いていたと言われている。しかし朝鮮戦争当時をピークに、次第に下降線をたどり、1957(昭和32)年の売春防止法の施行によりチャブ屋は終焉をむかえたのである(重富 1995)。

6.4 「チャブ屋」の現在

6.1で述べた通り、『岩波 国語辞典 第7版 新版』(西尾他 2011)と『旺文社 国語辞典 [第十一版]』(山口他 2013)にはチャブ屋についての記述があるが、『三省堂国語辞典 第七版』(見坊他 2014)と『明鏡国語辞典 第二版』(北原 2010)には記載されていない。チャブ屋の記載の有無は国語辞典によって異なるが、記載されている場合でもチャブ屋の意味は横浜の開港場周辺で使われていた意味とは異なる。現在では横浜出身の人でも「チャブ屋」という語をほとんど知らない。また実生活でチャブ屋という言葉を使用することもまずない。従ってチャブ屋ということばもチャブと同様に現在ではロング(1999)の3つの分類の(1)後に使われなくなり死語となった、に分類できるであろう。

7. 「チャブ台」

7.1 「チャブ台」の意味

チャブ台は『岩波 国語辞典 第7版 新版』(西尾他 2011)によると折りたためる足の付いた、低い食卓とあり、『旺文社 国語辞典[第十一版]』(山口他 2013)によると短い脚の食卓用の台とある。『三省堂国語辞典 第七版』(見坊他 2014)と『明鏡国語辞典 第二版』(北原 2010)にもチャブ台について同様の記述がある。チャブ台の呼び方は地域によって異なり、関東から名古屋、大阪などではチャブ台、富山、岐阜、三重、九州(佐賀、長崎、熊本)ではシッポク台、そして主に東北地方、富山、島根では飯台とよばれている。時期的には飯台、シッポク台の方が古く江戸時代からあるが、チャブ台は明治以降である(小泉 2002)。

7.2 「チャブ台」の語源

まず江戸時代の長崎では中国料理のことを卓袱(シッポク)料理と呼び、それに使用されていた食卓が卓袱台であった。卓袱は中国の広い地域で使用されていた唐音ではシッポクだが、福建省などの中国南部の発音ではチャフ(cho-fu)である(小泉 2002)。この読み方が何らかのルートで入ってきたという説や米国化した中国料理である Chop suey からという説がある(小泉 2002)。さらにアメリカの簡易食堂である Chop house からという説もある(伊川 2005)。Chop suey と Chop house 説に関しては5.2の「チャブ屋」の語源と重複する。さらにチャブ屋で使われた食卓(テーブル)がチャブ台の元になっているなど諸説あるが、語源の特定は難しい。

7.3 「チャブ台」の歴史

7.3.1 銘々膳～テーブル

日本では長らく食事には銘々膳を使用していたが、江戸時代から長崎の出島ではオランダ人や中国人がテーブルや卓袱台（シッポクダイ）を使用していた。明治時代に入るとまず支配階級の人々が西洋文化推進の先兵となり西洋館を建て、洋風のテーブルを導入し、洋食を食べ始めた。やがて町にも西洋化が進み、西洋料理屋やミルクホール、ピヤホールといったテーブルを使う飲食店が現れた。こうした風潮の中で一般の人々の暮らしも、意識も変わり始めたのがこの時期である。仮名垣魯文（1870）の『西洋道中膝栗毛』ではテーブルのことをチャブダイといている。大衆小説にでてきているということは、チャブ台ということばが当時かなり広く知られていたと考えられるが、この場合はあくまでも異国情緒を演出するためであって、チャブ台ということばが広く知られていたからといって、日本人の日常生活に入っていたわけではない。1877(明治 10)年ころの教科書には銘々膳が記載されている（小泉 2002）。

7.3.2 テーブル～チャブ台

チャブ台は明治になると少しずつ一般の人の中で使われるようになっていった。西洋料理屋やミルクホールなどのテーブルを日本家屋の和室向けに作り替えたともいわれている。1891(明治 24)年に折畳脚のチャブ台についての特許出願が多数出されていて、庶民向きの安くて便利な食事台への工夫・改良が重ねられていった。明治末期には都会ではかなり普及していたが、地方都市や農村・漁村まで広がったのは大正末期から昭和初期にかけてであった。1935(昭和 10)年頃にはほぼ全国的に行き渡っていた。戦後、GHQ の要請にそって家庭民主化が推進され、「民主的な家庭・一家団欒の食事」の象徴としてチャブ台はますます普及していき、昭和 30 年代にはチャブ台の全盛期を迎えたのである（小泉 2002）。

明治になり新しく出現した都市の労働者階級はそれまでの封建的な束縛から比較的自由になった。日本の狭い住まいで彼らに必要なだったのは実用性である。そのため家族全員が一つの食卓を囲み、座って食えることができ、しかも使わない時は脚をたたむことのできるチャブ台のような形式のものが普及していったのである。

7.3.3 チャブ台～テーブル

明治から昭和にかけて国民の食卓となっていたチャブ台も昭和 30 年代後半から生活の合理化と西洋化指向の流れ、経済の高度成長によって次第に椅子座のダイニングテーブルに変わっていった。この時期はチャブ台からテーブルへの転換期といえる。戦後からあこがれたアメリカ流の豊かな暮らし、その象徴である明るく、楽しいダイニング、これが経済成長によって手が届くものとなったことで、テーブル化は急速に進んでいった。昭和 40 年代から 50 年代にはチャブ台がテーブルへと交代し、60 年代にはほぼ転換が終了したのである（小泉 2002）。

7.3.4 「チャブ台」の現在

チャブ台という語は、『岩波 国語辞典 第7版 新版』（西尾他 2001）、『三省堂国語辞典 第7版』（見坊他 2014）、『明鏡国語辞典 第二版』（北原 2010）、『旺文社 国語辞典 [第十一版]』（山口 2013）の4社の国語辞典に記載されているので、一般的な国語辞典の多くに「チャブ台」の記載があると考えられる。しかし、現在では昔ながらのチャブ台はほとんどの家庭で使われていない。2018年10月から11月に横浜市内及び東京都内で12歳から28歳までの男女15名（男性7名、女性8名）にチャブ台についての聞き取り調査をおこなった。質問内容は①チャブ台を知っているか。②知っている場合はどうして知っているのか。調査の結果、質問①に対して、全員がチャブ台ということばを知っていると回答した。質問②の回答については表2のとおりである。

表2 質問②の回答（回答者15名）

チャブ台を知っている理由	人数
テレビアニメ、ドラマ	6
アーケードゲーム、ゲームアプリ	6
小説、教科書	2
祖父母が使っている	1
回答人数合計	15

チャブ台を知っている理由で多かったのはまずテレビである。これは昭和時代を題材にしたサザエさん、ちびまる子ちゃんなどのアニメ、テレビドラマなどでチャブ台を目にする機会が多いことによるものと考えられる。テレビと同様に多かったのはゲームである。昭和30年代のアニメ「巨人の星」でよく知られるチャブ台がえしがアーケードゲームやゲームアプリとして開発され、それらが若者の間で広く知られているのである。他にも小説や教科書を通してチャブ台ということばを知った、田舎の祖父母が使っているとの回答もあった。今回の聞き取り調査の結果から、若者世代の多くに「チャブ台」という言葉が認知されているといえるであろう。

先述のとおり、現在、昔ながらのチャブ台は一般家庭、特に都市部ではほとんど使われていない。しかし、明治から昭和にかけて全国的に広がったチャブ台はテレビアニメ、ドラマそして映画などで放映されることも多く、年代に限らず目にする機会が多い。さらにアーケードゲームやアプリの開発で若者にとって身近なものになっていることがチャブ台の認知度につながっているのではないだろうか。チャブ台ということばは明治初期から使われ始め、チャブ台の普及とともに全国に広がり共通語となった。チャブ台そのものが一般家庭でほとんど使われなくなった現在でもアニメやゲームなどを通じ

て若者世代にまでも知られている。このようなチャブ台の認知度からみてロング(1999)の3つの分類の(3) 全国に広がり共通語となったもの、に分類できるであろう。

8. 「ノーチャブ」

8.1 「ノーチャブ」の意味

食事を省く、とらないという意味である(横浜郷土研究会 1997年)。

8.2 「ノーチャブ」の語源

英語の否定「ノー」とピジン起源の日本語で、食事という意味の「チャブ」とを合わせた造語である。

8.3 「ノーチャブ」の使用

8.3.1 横浜開港後～

ノーチャブが使われ始めた時期ははっきりしないが横浜開港後、早い時期に港の荷役夫や人足など、いわゆる下層階級の人々の間で使用されていたようである。次のようなノーチャブに関する記述がある。

此の三吉町は八幡谷戸の宇梶藤太郎と云う博徒の縄張り内であつて木賃宿には親分から幾人となく乾兒を泊まらせてゐるから人足どもが汗水たらして稼いで来た賃銭も大抵はト晩のうちに巻き上げられ中には翌朝のめし代にも差支へる様になり、～中略～ 結局「ノウ、チャブ」の悲境に陥る様な始末だ(横浜郷土研究会 1997, 178-179)

衣服は襤褸に甘んじて居るけれど矢張宵越の銭は持たぬと云う風がみえる、雨の降る日などは屑拾いにも出られないから一日中此部落は賑やかであるが三吉町者のやうな我身知らずはさすがに此処には居ないので「ノーチャブ」の悲境に陥ることは先づない方だ(横浜郷土研究会 1997, 216)

このような記述から横浜開港後、港周辺で働くいわゆる下層階級の人々がノーチャブを使用していた様子が垣間見えるのである。

8.3.2 1970年代～

横浜開港当初から長きにわたり横浜港周辺では積み荷を肩に担いだ荷役夫など港湾労働者たちの姿が見られてきた。しかし1968(昭和43年)年5月に横浜港へコンテナ船が入港を開始した。1970(昭和45)年にはフルコンテナ船が入港し、その後も船舶の積み荷のコンテナ導入が急ピッチで進行した。1990年代には80%近くがコンテナ化したのである。船舶のコンテナ化に伴いノーチャブを使用していた荷役夫たちの仕事は次第に減っていき、その姿を消していったのである(朝日新聞横浜支局他 1991)。

8.4 「ノーチャブ」の現在

現在の横浜港は完全にコンテナ化し、開港当時とは全く違う様相になっている。しかし港周辺の海運業に従事する人々の間では現在もノーチャブということばが使用されている。1949(昭和24)年創業の東海海運株式会社のホームページにある用語集にはノーチャブは「本船を時間通り出港させるために食事をとらないで作業を続行し終了させる事」とある。さらに「食事・休憩は1時間あるが、規定通り休憩すると本船の決まった出港時間が延びるので食事・休憩を30分で切り上げて作業する事」として半チャブという新しい語まで作りだしている。また2018年6月14日(木)、ラジオFM Yokohamaの番組中のギョーカイ用語の特集で港湾関係者の投書として「ステベの具合によってはノーチャブかも」(船内荷役の具合によっては休憩なしかもしれませんね)が紹介されていた。投書した方のコメントとして「わかる人は港湾関係者だけだと思います」とあった。このようにノーチャブは開港以来、港の船舶の積み荷を肩に担いで運んでいた荷役夫の時代からコンテナ化した現在に至るまで港湾関係者の間で使われ続けてきたのである。

現在のみなとみらい地区では数10年に渡り、商業施設やマンションなどの建設工事が行われている。建設工事現場で働く人の話では、みなとみらい周辺の建設工事現場ではノーチャブということばは使われていないということである。従って、ノーチャブは海運業に携わる港湾関係者のみの間で引き続き使用されている職業語であると同時に港周辺地域だけで使用されている地域言語でもあることからロング(1999)の3つの分類の(2)地域言語として残ったもの、に分類できるであろう。

9. まとめと今後の課題

今回の調査でチャブとその関連語の使用開始時期から現在までの変遷が明らかになった。「チャブ」と「チャブ屋」はロング(1999)の指摘した3つの分類のうち(1)後に使われなくなり死語となったもの、に分類した。「チャブ台」はチャブ台そのものが使われなくなっても現在でも若者世代にまでその認知度が高いことから(3)全国に広がり共通語となったもの、に分類した。そして「ノーチャブ」はコンテナ船が停泊する港周辺で使われていることから(2)地域言語として残ったもの、に分類した。さらに同じ港周辺でも建設工事現場では使用されておらず、海運業に従事する人々の間でのみ使用されていることから職業語としても分類できることがわかった。このようにこれらのピジン起源の日本語と関連語の現在をロング(1999)が指摘した3つのピジン語の行方に分類することができたのである。

開港場となった横浜でコミュニケーションのために生まれたピジン日本語はカイザー(1998)で指摘されているように日本語を基層言語(substrate language)とした唯一のピジンとして重要な研究対象である。その中のいくつかの語彙は日本が開国する以前から太平洋を往来する船乗りの間で使用された「海上ピジン」とも関連性があると考えられる。今後の課題として、さらにピジン日本語の語彙の変遷を調査し、海上ピジンとの関係性を明らかにしていきたいと考えている。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、聞き取り調査にご協力いただいた皆様に心より御礼を申し上げます。またお忙しい中、ご指導して下さったロング・ダニエル先生にも心より御礼を申し上げます。

参考文献

- 朝日新聞横浜支局、朝日新聞神戸支局（1991）『横浜神戸 二都物語』 有隣堂
- 伊川公司（2005）『横浜・ハマことば辞典』 暁印書館
- 今井邦彦（2007）『ファンダメンタル音声学』 ひつじ書房
- ウエンライト（Van Reed, Eugene M.）（1862）『和英商話』 師岡屋伊兵衛
- Fm yokohama 84.7, 「ちょうどいいラジオ」
<<http://blog.fmyokohama.jp/cer/2018/06/614eyes-3f71.html>> 2018年9月30日アクセス
- カイザー、シュテファン（1998）「Yokohama Dialect—日本語ベースのピジン」
『国語研究論集』 pp. (83)-(101). 汲古書店
- 仮名垣魯文（1870）『西洋道中膝栗毛：万国航海』 日月堂
- 北原保雄（2010）『明鏡国語辞典 第二版』 修汲館書店
- 見坊豪紀・市川 孝・飛田良文・山崎 誠・飯間浩明・塩田雄大（2014）『三省堂国語辞典 第七版』 三省堂
- 小泉和子（2002）『ちゃぶ台の昭和』 河出書房新社
- 斎藤昭三（1929）「横浜名物チャブ屋盛衰史」『グロテスク』 昭和4年6月号
pp. 77-86. 文藝市場社
- 重富昭夫（1995）「日本のムーランルーージュ横浜」『チャブ屋』物語 センチュリー
- 竹林滋・清水あつ子・斎藤弘子（2015）『改訂新版 初級英語音声学』 大修館
- 谷崎潤一郎（1982）「港の人々」『谷崎潤一郎全集第9巻』 pp. 427-461. 中央公論
- 東海海運株式会社 用語集, <http://www.tohkaikaiun.com/words/jp_a.html>
2018年9月30日アクセス
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫（2011）『岩波 国語辞典 第7版 新版』 岩波書店
- 山岸勝榮（2015）『スーパー・アンカー英和辞典 第5版』 学研プラス
- 山口明徳・和田利政・池田和臣（2013）『旺文社 国語辞典 [第十一版]』 旺文社
- 横浜郷土研究会（1997）『横浜繁盛記 <復刻版>』 横浜郷土研究会
- 横浜市役所（1973）『横浜市史稿 風俗編』 名著出版
- ロング、ダニエル（1999）「地域言語としてのピジン・ジャパニーズ—文献に見る19世紀開港場の接触言語」『地域言語 11』 pp. 1-10.

研究ノート

Atkinson, Hoffman (Bishop of Homoco) (1879) *Revised and Enlarged Edition of Exercises in the Yokohama Dialect.*

Daniels, F. J. (1948) *The Vocabulary of the Japanese Ports Lingo.* Bulletin of the School of Oriental and African Studies Volume XII: Parts 3 and 4 pp. 805-823. The School of Oriental and African Studies.

Todd, Loreto (1974) *Pidgins and creoles.* London and New York: Routledge and Kegan Paul Ltd.

(トッド, ロレット 田中幸子 (訳) (1986) ピジン・クレオール入門 大修館書店)

(にしざわ まさよ・首都大学東京大学院博士前期課程)